

# 水俣学通信

第 6 号  
2006.11.1

Newsletter from the Open Research Center for Minamata Studies



国際フォーラム 水俣会場 2006.9

## 目 次

論説：新潟水俣病のこと……………2 川那部 浩哉（琵琶湖博物館）	2006水俣宣言……………5
「水俣病と環境についての高校生 アンケート」について……………3	研究員報告……………6
報告：「環境被害に関する 国際フォーラム」……………4 ～水俣50年の教訓は活かされたか～ 水俣学現地研究センター長 宮北 隆志	活動報告……………7 「大学院福祉環境学 フィールドワーク I 報告」
	今後の活動予定……………8 第2回水俣病事件研究交流会予告

## 《論説》

## 新潟水俣病のこと



琵琶湖博物館 川那部 浩哉

お恥ずかしいことながら、2006年5月下旬に、初めて水俣へ行った。相思社へ伺い、遠藤邦夫さんにご案内願って市内を回り、たまたま道へ出ておられた杉本栄子さんにもお会いした。そして翌日、熊本学園大学水俣学現地研究センターに、原田正純さんを訪ねた。

百問だったかに阿賀のお地藏さんがあつたりはするものの、新潟水俣病のことは、相思社での展示にも比較的になかったようだし、「熊本県全体ではもちろん、水俣市周辺でもそれほど知られていない」との、原田さんの要請を、安請合いしたのが運の尽きである。

それから半年経った。この間、『ごんずい』96号に「阿賀野川と新潟水俣病」の特集も載り、今更と思うところもある。しかし、新潟水俣病によって私の生態学は変わったと、今も思い続けているのは事実だし、「水俣病」の科学についても同じことが起こったし、きっとこれからも起こる筈だし、さらに起こらなければならないものと、勇を鼓して書き連ねさせて頂こう。

\* \* \*

公害問題一般に関心と痛憤を感じていた程度の私に、現場へ連れ出すきっかけを与えて下さったのは、当時東大工学部助手の宇井純さんで、1967年9月27日のことである。東京のある出版社へ押し掛けられ、「河川生物の生態学をやっている研究者として、新潟水俣病をどう捉えているのか」との詰問を受けたのがそれだ。私は、逃げの一手を打ち続けたのだが、「〈生物どうしが食う食われるの関係を中心に、多様な関係を持っている、その諸関係の総体としての生物群集〉という私の研究上の主題が、この〈事件〉の本質的部分の少なくとも一つではないのか」。こういう疑問は、弁解すればするほど私の心に影を増してくる。これがきっかけとなって、まだ現地を見てもいない段階で、同年11月大阪での研究会で、「食物連鎖による有機水銀濃縮と阿賀野川内におけるその地域の変異がからんでいるのでは」と、考えてきたことをおそろおそろ述べたところから、すべては始まってしまったのである。

翌68年7月、宇井さんのほかに新潟大の二人の助教授が参加する。理学部の本間義治さんと医学部の滝沢行雄さんだ。新潟県下の中高生の先生方も加わり、本間さんを中心に「新潟河川生態研究グループ」が生態

調査を始める。私が比較的長く阿賀野川を調べた最初は69年8月で、このとき同行してくれた何人かの京大の学生の中から、4回生の高見優さんが自分の意志で新潟に常駐するようになり、滝沢さんの研究室で有機水銀などの分析を精力的に始める。そのまま現在まで新潟に居着いてしまった人で、ネコの死体からの水銀の発見や上流鹿瀬町での患者の「発掘」などにも、かなり大きい役割を果たしたと、その後何人かから聞いた。

新潟水俣病裁判(昭和42年(ワ)第317・318・319号事件)では、70年の1月と3月に、原告側証人として立ったほかは、ほんの少しお手伝いしただけに終わった。白山駅近くの西山旅館だったかに集まり、相手側の主尋問に対する証言の内容を読み直して、反対尋問で何を明確にするかを検討する会に、69年2月から数回出た覚えがある。証言の中には、「目くらまし」以外の何ものでもないようなものがあり、いささかならず憤った記憶もある。

近喜代一さん・桑野忠吾さんなど、新潟水俣病被害者の方々には、たいへんなお世話になった。どこかに書き付けた覚えもあるが、「有機水銀は上流からではなく、地震のときに海から遡ってきたもの」との主張の反論に取り組んでいた最後の頃、「それなら、新井郷川の魚が汚染されていたのは何故だ」と、ただそれだけ、怒りの声を挙げられたのを聞いて、人に知られないようにしながらも、大いに落ち込んだ覚えがある。私はそれを、思いつきもしなかったからだ。地元の人、それも川の生きものとの関係で生業(なりわい)を成り立たせている人の、知恵と知識に改めて打ちのめされたものだった。

71年5月の結審のあと、20-21日に加茂へ伺った。弁護団長だった渡邊喜八さん宅にお招き頂いたもので、私の写真帳には加茂祭の写真2葉があり、「渡辺・清野・坂東弁護士と」注記がある。渡邊さん・高見さんと3人、お宅の前で撮ったものもある。関係する写真で残っているのは、その他には僅か1葉で、新潟市内の食堂の前で、渡邊さん・宇井さん・滝沢さん・飯島伸子さんと経営者の姿があるもののみだ。調査風景などの写真は、本間さんたちに任せましたが、1枚もない。そして9月の判決日には、失礼して新潟へは伺わなかった。

## 「水俣病と環境についての高校生アンケート」について

現在、水俣・芦北・出水の高校生を対象とした「水俣病と環境についての高校生アンケート調査」を、羽江、大野、土井が中心となっておこなっています。3名は、すでに2000年7月に水俣市の小学生と中学生を対象にした同様なアンケートをおこなっており、今回は対象地域を拡大し、高校生を対象として、水俣病や環境に関する高校生の意見を聞く目的で、教育委員会や各高等学校の理解と協力のもとにアンケートを7月に実施しました。調査の目的のひとつは、若い世代が水俣病をどのように学び、患者さんたちの声をどのように受けとめ、地域社会の再生にどのように貢献しようとしているのかを率直に聞いて、今後の研究に活かすことです。また、水俣病問題を継承し、負のイメージから正のイメージへの転換を担う次世代の若者の意識に接することで、大人の目線だけでなく若者・子どもの目線からの水俣病問題が明らかになってくるのではないかと考えています。

実は数量的な調査は、これまでに水俣の先生たちによる「環境（公害）アンケート」調査や、新聞社がおこなっている「水俣市民意識調査」、また、水俣・社会ネットワーク研究会による「市民アンケート調査」など、水俣市を中心にいくつかの社会調査・市民意識調査がおこなわれています。水俣の先生たちの調査には、患者さん家族へのアンケートもあり、患者さんの立場に立って水俣病問題に取り組もうとする真摯な姿が反映していますし、また、新聞社がおこなった何回かの市民へのアンケート調査には、水俣市民の生活やチッソとのかかわり、差別や水俣病報道についての質問もあり、複雑な住民の心と問題解決の難しさが過去の

データとの比較で検証されています。

先にも述べましたように、この「水俣病と環境についての高校生アンケート」調査は、2000年7月に、協力を得られた水俣市の学校の5、6年生（小学校）と中学1、2年生に実施した調査を受け継いで、高校生を対象としたものです。2000年の小・中学生調査では、①水俣病問題についての認知 ②患者さんとのかかわり ③郷土愛、地域愛の高さ ④世代間の意識の違い ⑤もやい直しへの態度などを質問項目に立て、水俣病問題を学ぶことで、強い地元への愛着や問題解決への意欲をもつ子どもたちの姿が浮き彫りになっています。子どもたちは、かつて水俣病をめぐる市民（大人たち）の分裂と対立を「負のイメージ」として受け止めるだけではなく、自分たちの郷土を新しく作り上げていく若者の強いエネルギー（「正のイメージ」）へと転換していく可能性をも示していました。

今回は今年4月から調査票の検討会を何度か開き、熊本県教育庁への依頼や各高等学校を訪問して意見交換を重ね、正式な調査依頼をおこない、7月下旬から8月にかけて本調査と調査票の回収をおこないました。大人世代と若者世代と、水俣病問題についての世代間の意見や価値観の違いが認められるのか、若者の中にも小・中学生と高校生との違いはあるのか、現在、水俣病問題の新たな状況が生じていますが、高校生の関心は環境問題の何に向けられているのか、これからコンピュータ解析や内容分析などを手がかりとしながらお互いに議論を重ねていく予定です。

（文責：大野哲夫）

／ あれから35年経った今、近さんも桑野さんも、渡辺さんもまた、今はすでにおられない。

\* \* \*

実のところ私にとっては、新潟水俣病に係わったおかげで、自分の生態学はかなり変わったことが大きい。それ以前から口では強調してきていた「生きものの関係の総体」に、本格的にのめり込むきっかけになったのだ。科学を真に進めるには、自分自身の寄って立つ科学の基盤そのものを、突き崩されなければならない

と、よく言われる。そんなことはとても出来てはいないけれども、この「事件」に係わる破目にならなかったなら、生きものの関係を一対一のことの集まりとしてではなく、多対多のままでも扱おうとし、さらにその歴史を考えたいとする楽しさは、私には出現しなかったのではあるまいか。

この意味において、科学だけではなくその他もろもろをも本格的に進めるものとして、私は「水俣学」にさらに期待するところが、たいへん大きいのである。

《報告》

## 環境被害に関する国際フォーラム

—水俣50年の教訓は活かされたか—

水俣学現地研究センター長 宮北 隆志

2006年9月8日から12日にかけて熊本学園大学（熊本市）並びに水俣市総合もやい直しセンター「もやい館」（水俣市）にて、熊本学園大学水俣学研究センターの主催、日本環境会議の共催で、環境被害に関する国際フォーラムが開催された。今回の国際フォーラムは、水俣病公式確認50年を期して、世界各地の公害被害者の視点からそれぞれの地域における事件を検証し、水俣の教訓がいかに活かされたのか、不十分にしか活かされていないとすればそれは何故なのか、また今後、水俣の教訓を真に活かすために何がもめられているのかについて共に考え議論することを目的とするものであった。世界14の国・地域からの招聘者約40名と自費参加者20名に、国内からの参加者を加えて300名を超える被害者、市民、NPO活動家、研究者、行政関係者などの参加を得て、国際的な交流と意見交換、議論がなされた。

### フォーラム初日（8日）

午前中には、開会式で熊本学園大学の坂本正学長から参加者への歓迎の挨拶を受けた後、水俣学研究センター運営委員の富樫貞夫熊本学園大学教授と日本環境会議代表理事の宮本憲一元滋賀大学学長による基調講演が行われた。富樫氏は、「水俣病事件の教訓」と題した講演で、「水俣病のような惨禍は二度と繰り返してはならないこと。そのためには、予防原則にもとづいて、できるだけ早い段階で汚染状況を把握し、そのリスクを評価して必要な対策を講じる必要がある」ことを強く訴えた。また、宮本氏は「環境被害の責任—水俣病からアスベスト災害へ」という演題で講演し、「公害や環境被害がなくなるには、大量生産・流通・消費・廃棄の社会経済システムと基本的人権や民主主義が未発達の家や市民社会にあること。そしてその

責任はこのシステムの責任者である企業とその枠組みを支えている政府・自治体にあること」を強調した。

午後からの

2つセッションでは、中国・北京政法大学公害被害者法律支援センターのマ・イエン助教授から「中国における水質汚染防止に関する法と政策」、韓国環境運動連合のキム・ヘジョン事務総長から「韓国における環境問題の現状と反公害運動」、タイ・チェンマイ大学のボラビッド・チャレオンラート教授から「タイの公害・職業病問題」、フィリピン・デラサル大健康化学科のダンテ・G・シンビュラン助教授から「フィリピンにおける環境問題の現状と反公害運動」、南アフリカ・ソエト希望の丘（SOMOHO）のマンドラ・メントール代表から「ソエト希望の丘から協働の力を信じて：アパルトヘイトとコミュニティの再生」と題した総括的報告を受け、参加者間における問題意識の共有を図った。

### フォーラム2日目（9日）

「水銀による環境汚染、健康被害」、「砒素汚染、複合汚染、放射性廃棄物」、「産業災害、ダイオキシン、PCP」などをテーマとする5つのセッションが企画され、13の国・地域からの深刻な環境汚染並びに健康被害に関する報告がなされた。

### フォーラム3日目（10日）

午後から水俣市に移動し、海外からの招聘者を中心に水俣市立水俣病資料館を訪問し、水俣病事件50年の経過とその課題についての理解を深めた。夜は、今回のフォーラムの特別企画である「喜納昌吉とチャンブルーズコンサート」に合流し、歌と踊りでフォーラム参加者同士の交流、更には水俣市民との交流が図られた。4日目（11日）は、午前中「水俣病患者、支援者からの世界への訴え」と題したワークショップで、水俣病患者互助会の坂本フジエさん、チッソ水俣病患者連盟委員長長の松崎忠男さん、水俣病患者連合代表の佐々木清登さん、水俣病不知火患者会会長の大石利生さん、語り部の会代表の浜元二徳さん、並びに、新潟・木戸病院院長の斉藤恒さんから、水俣並びに新潟における水俣病被害者の置かれている現状とその課題について報告を受けた。午後は、元チッソ労働者の山下善寛さんを案内人として水俣現地エクスカージョンが行われた。水俣病の原因企業チッソの正門前で犠牲者への黙祷を捧げた後、水俣工場を一望できる高台から百間排水口を經由して水俣病患者多発地帯に向かい、湯堂で



フォーラム初日：国内外からの参加者で一杯の会場（熊本学園大学）

## 2006 水俣宣言

### 環境被害に関する国際フォーラム ～水俣50年の教訓は活かされたか～

私たちは2006年9月8日(金)～12日(火)、熊本学園大学水俣学研究センターおよび日本環境会議の主催で、「環境被害に関する国際フォーラム：水俣50年の教訓は活かされたか」を開催しました。このフォーラムには、世界から14カ国・地域の環境汚染が発生している地域の被害住民、NGO活動家、研究者および日本全国各地から300人が参集しました。

2006年は水俣病公式確認50周年にあたります。この半世紀、人類は深刻な環境問題に直面してきました。水俣病は人類が初めて経験した広汎な環境汚染で、食物連鎖を通じて起こった化学物質による中毒事件でした。したがって、ここから、教訓として学ぶものが多かったはずですが、しかしながら、日本ではまだ水俣病は終わっていないばかりか、国や県（地方行政）は、裁判で糾弾された責任を果たそうとしていない。最近の環境省の水俣病に関する懇談会においても、環境省は認定制度の過ちを認めようとはしなかった。また、世界各地で環境汚染・公害がおき、住民の闘いはなお継続しています。このように、国内はもとより世界的規模で見たとき水俣病の教訓、負の遺産が、十分に活かされているとは思えない現実があります。

水俣病の歴史から学ぶことは、50年を経過してもなお、被害の救済が完遂されていないばかりではなく被害の全貌さえ分かっていないことに示されている失敗の歴史であるという事実の確認であり、同じ過ちを日本や世界で繰り返さないことです。

私たちは今回のフォーラムで、環境汚染の現実や被害の現状そして被害住民の闘いについて、数々の事例発表や議論を通して確認しました。問題解決のために、そして環境汚染による被害を繰り返さないためには、常に被害者の視点に立って、考え、行動する必要があることが重要です。また、幅広い情報交換と交流が必要であり、それが可能であることが確認されました。フォーラムの報告、討論ならびに水俣での出会いを通して、水俣病がなお終わっていないことを確認し、過去の過ちに学び、水俣の被害者と連帯していくことを訴えます。

5日間の世界各地の報告と参加者の討論を経て、水俣病50年の負の教訓を将来に活かすために、この宣言を採択します。

2006年9月12日

国際フォーラム参加者一同



5日目：ワークショップ 世界各国・地域の被害者を囲んで  
(水俣市ちやい館)

は水俣病患者互助会の坂本フジエさんから、また、茂道では水俣病患者で漁師の杉本栄子さんから、水俣病発生当初から現在に至る漁村地域における生活と水俣病被害に関わる話を聞いた。また、夜には、湯の児温泉においてフォーラム参加者と水俣市民・被害者との交流会がにぎやかに開催された。

#### フォーラム最終日(12日)

午前中、「世界各国・地域の被害者を囲んで」と題し

たワークショップが開かれ、「韓国・温山工業地帯における公害」、「フィリピン・基地汚染の現状と問題点」、「水俣病患者の置かれている現状」について被害者とその支援者からの報告を全体で受けた後、各地域の被害者から生の声も交えて活発な意見交換と、今後に向けた問題提起がなされた。午後の総括セッションでは、5日間のフォーラムでの報告や討論を踏まえての最終的な意見交換がなされ、最後に全会一致で「2006水俣宣言」を採択して閉会した。

今回の国際フォーラムの実行委員長である熊本学園大学水俣学研究センター長の原田正純教授がフォーラムの直前に体調を崩して入院され、フォーラムに参加いただけなかったことは大変残念であったが、国内外の公害・環境被害の被害者、支援者・NPO、一般市民・学生、研究者、行政担当者など多様な参加者による国際交流が実現したことは極めて有意義であったと考えられる。フォーラムの企画・運営にご協力いただいた数多くの皆さんに深く感謝したい。

## チッソを語るもう一つの「コトバの世界」

商学部 教授 酒巻 政章



数年前に本学の産業経営研究所が創立40周年を記念して研究プロジェクトを立ち上げた際に、社会福祉学部の花田さんから「チッソについて何かやろう」と持ちかけられた。二つ返事で引き受けたものの、私の領域からどんな研究ができるのか全く考えていなかった。

会計は「企業の言語」と言われている。個別企業を会計サイドからアプローチする以上、当該企業の会計言語行為の産物である「財務諸表」を中心におくしかないだろう。会計学の領域でも水俣病加害企業チッソを扱った研究が無かったわけではない。それらはチッソ企業集団の行動を連結財務諸表という書記言語を通して批判的に分析しようとするものであった。今の時代文脈でこうした方法で企業批判を繰り返すことには、私自身あまり興味がなかった。では、問題をどう設定するか。

取りあえずチッソのこれまでの財務諸表に一通り目を通した。水俣病事件に関する資料もボツボツ読み始めた。ある時、1978年（昭和53年）に福田赳夫内閣のもとで閣議了解された『水俣病対策について』という一つの文書を目にした。この文書は、その後22年間にわたって、水俣病被害者への被害補償に決定的な影響を及ぼし続けることとなったものである。私の関心を引いたのは、熊本県

がチッソへの金融支援を行うために発行する地方債の発行限度額を決める一つの算式であった。発行限度額とは、チッソへの金融支援額であり、さらに言えば、水俣病被害者に支払われる補償額なのである。私なりの言い方をすれば、この補償額を決める算式に「会計のコトバ」が織り込まれているのである。金融支援の必要性を説く理由として「チッソの経営状況」が言及されてもいた。そこで、過去の「財務諸表」を読み直すことによって、『水俣病対策について』で表明されているチッソ金融支援の言説を検証する作業をした。われわれの成果は「水俣病被害補償にみる企業と国家の責任論」（『水俣学研究序説』所収）として発表されている。

会計言語（会計情報）は、企業から国家に至るまで、さまざまな組織でそれぞれの組織主体が自らの行動や政策を説明するさいに、ときには決定的な要因として、利用されている。そうした説明の正当性を「会計言語の周辺」から解析するという作業も会計学研究の一つの領域として成り立ちうるような気がしている。次のテーマとして考えているのは、1960年代から70年代のチッソ労使交渉の経過をそこで使用されてきた「会計言語」に焦点をおいて再検討してみようというものである。

## 障害学と水俣学

社会福祉学部 教授 堀 正嗣



私の専門は障害学です。障害学とは簡単に言うと、①障害当事者が主体になった学問（当事者学）、②障害を個人の属性としてとらえるのではなく、impairment（機能的制約）を持つ人に対する差別や抑圧、彼らを無力化する現代社会や文明のあり方として認識し、その構造を分析しつくり変えようとする知の運動です。私は、水俣学と出会い、水俣学と障害学は本質的に共通した学問であると感じています。

まずどちらも当事者学であるという点で共通しています。私は学園大に赴任し、はじめて杉本栄子さんと坂本しのぶさん、ホットハウスの当事者の皆さんのお話を聴き、深い感動を覚えました。水俣病という公害を、専門家や行政が第三者の立場から研究したり語るのではなく、当事者が水俣病の苦しみや哀しみ、そしてそこから

得られたかけがえのない教訓や価値を語る、そのことこそが水俣学の原点だと思います。そして、その語りや、私たちの社会や経済のあり方、科学や文明のあり方、価値観や生活の仕方を根底から揺るがし、つくり変えることを迫っているのです。そして、そうした当事者の声に真摯に耳を傾け、自らの学問や生き方を問い直してきた原田正純先生をはじめとする多くの人たちがおられます。そうした営み、知の運動が水俣学だと私はとらえています。

一方で水俣学と障害学との視点の違いもあるように思います。私は初めてホットハウスを訪ねてお話を伺ったとき、「胎児性水俣病患者」という言い方に、違和感を持ちました。私は「胎児性水俣病障害者」と言っています。なぜなら「患者」という表現には、障害学が主要な

## 《活動報告》

## 8月、大学院生とともに横浦調査

大学院社会福祉学研究科長 花田 昌宣

2006年8月、水俣学研究センターは、大学院の福祉環境学フィールドワークの授業と連動して、御所浦調査を行った。単に健康被害や日常生活における生活障害だけではなく、人々の移動、生活習慣や職業生活など水俣病事件がもたらした地域社会の変容まで射程に入れて調査することとし、今回はその予備調査と位置づけた。対象地区として、御所浦島の隣の島、横浦を調査することとした。地区の選定に当たっては、本学大学院を修了し、新潟の看護大学で教鞭をとっていた浦崎貞子さんが横浦出身であり調査協力して下さったことも大きかった。

この島には、私たちが知るかぎり、学術的な調査が入ったことはなかった。私たち自身も、被害実態がどうなっているか、水俣病がどのように受け止められているかもわからないまま調査に着手した。というよりは、わからなかったからこそ、調査対象地域として選択したのである。

もちろん一回の調査ですべてを調べ尽くそうというのではなく、あくまでも今後に向けての予備調査と位置づけることにして着手した。8月4日水俣現地研究センターで打ちあわせ後、5日調査団がフェリーで横浦に到着し、民宿瀬の浦旅館に宿を定め、調査を開始した。参加者は教員9名、大学院生11名であった。人口1,000人弱のこの島は、海岸に沿って走る道が取り巻いており全周4キロほどである。この島は、もともと漁業を中心として発展した横浦と海運業を中心としてきた天草側の崎浦と与一ヶ浦に大きく二分される。

私たちは、最初から直接的に水俣病の調査に入るつもりはなかった。むしろ島の成り立ちや地域社会の構造、伝統や習慣、そして消費生活に至る現在の暮らしをまず知りたかった。その上で、水俣病がこの島にいかなる影響をもたらしたのか、そしてどのような被害があるのかを明確にしていくこととしていた。

正直に言って、何がどのようになっているのかわからなかったのである。

調査協力依頼のチラシをもって、全戸配布しながら、



横浦の港

話していただけたところには話を聞いていこうという作戦をとった。その中で住民の意識や考え方もわかるであろうと考えたし、決して無理はしないと考えたのである。

結果として、留守であった数軒をのぞいてほとんどの家に伺い、挨拶だけであったりした家も少なくないが、数十人のかたから、濃淡はあれ話を伺うことができた。本来事前の準備段階で知っておくべきことであったのだが、認定申請者及び新保健手帳に申請された方々はかなり多かった。

水俣病の話は発生初期段階から、海運や漁で水俣に行っていた人々からもたらされていた。ただ、それは多くの場合あくまでも対岸の出来事ではなかったようだ。この島でも、胎児性患者と思われる方についての話は、聞くこともできた。

とはいうものの、当然のこととはいえ、よそから調査に来たわれわれに対する警戒心が強かったのも確かである。ふだん見慣れない若者たちが漂着したことは島でも目立ったことであろう。本格的な調査はこれからである。この調査の御協力いただいた多くの方々に感謝申し上げたい。

↑抑圧としてそこからの脱却を図ってきた「医学モデル」のまなざしを感じるからです。青い芝の会の脳性マヒ者の人たちとの出会いが私の障害学の原点です。そして、患者であることを拒否することが彼らの生き方の出発点

でした。

障害学と水俣学というこのテーマに、これからもこだわり続けていきたいと思えます。

## 今後の活動予定

### 第2回 水俣病事件研究交流会

開催日：2007年1月13～14日(土・日)

時間：13日 午後1時30分～17時30分  
14日 午前10時～16時

場所：水俣市公民館  
(水俣市浜町二丁目10番26号)

資料代：1,000円

懇親会参加費：3,500円(13日 18:30～ 福田農場)

参加申し込み：水俣学研究センター

hanada@kumagaku.ac.jp

mtajiri@kumagaku.ac.jp

### 水俣学研究センター日録

#### 7月

- 3日 カザフスタン水銀汚染研究研修：原田正純
- 4日 阿蘇高校研修：原田正純
- 6日 水俣教育旅行誘致コンソーシアム会議：宮北隆志
- 7日 第3回公開講座「社会と経済の今を考える」  
①「地域ブランドの確立」波積真理
- 11日 保健・医療・福祉相談
- 14日 第3回公開講座「社会と経済の今を考える」  
②「九州の産業遺産と産業観光」幸田亮一
- 17～23日 大学院福祉環境学フィールドワークⅢ韓国臨地研修
- 24日 水俣中間支援組織創出事業研修：宮北隆志
- 25日 保健・医療・福祉相談
- 28日 第3回公開講座「社会と経済の今を考える」  
③「九州の焼酎と地域ブランド」中野 元
- 30日 水俣市競舟大会に参加

#### 8月

- 3日 熊本県広域市町村連絡協議会研修「新しい地域運営の考え方」：宮北隆志
- 4日 第3回公開講座「社会と経済の今を考える」  
④「ソーシャルエコノミーの経験と地域の発展」花田昌宣
- 5～10日 大学院福祉環境学フィールドワークⅠ御所浦調査
- 10日 芦北地域振興局食育連携会議：宮北隆志
- 11日 第3回公開講座「社会と経済の今を考える」  
⑤「環境問題と流通(recycle)―消費者のgreen consumer がカギ―」出家健治
- 21日 水俣芦北地域戦略プラットフォーム第2回課題検討会
- 22日 保健・医療・福祉相談  
熊本市人権教育協議会研究大会「水俣病事件と差別の現在」
- 30日 都市交通九州地本青年女性協議会研修：宮北隆志

#### 9月

- 8～12日 環境被害に関する国際フォーラム
- 28日 第5期水俣学講義開講

### 水俣学研究センター関係出版物



『水俣病』原田正純著 韓国語版  
(韓国語題名『終わらない痛み：水俣病』キム・ヤンホ訳)

2006年7月

Hanul Publishing Group刊



『水俣学講義』原田正純編著 韓国語版(韓国語題名『水俣学：終わらない水銀の恐怖』)

2006年11月

韓国環境保健学会発行

図書出版大学書林刊

水俣学研究センターブックレット 定価800円

- ①『水俣再生への道』～谷川健一講演録～  
谷川健一著
- ②『“負の遺産”から学ぶ』～坂本しのぶさんと語る～  
原田正純著
- ③『ガイドブック：水俣を歩き、ミナマタに学ぶ』  
水俣学研究センター編著

『環』vol. 25

〈特集〉水俣病とは何か〔水俣病公式発見50周年記念〕  
藤原書店、5月刊行。定価3,200円

『水俣学研究序説』藤原書店、2刷が出来

2006年4月24日刊。定価4,800円

著者割引あり(2割引)

『環境と公害』第35巻第2号

2005年10月刊

水俣学研究センターでも取り扱います

### 編集後記

大学内・外、そして多くの水俣の人たちから支えていただいたおかげで、無事国際フォーラムを終えることが出来た。本当にありがとうございました。

## 水俣学通信

第6号 2006.11.1

編集／熊本学園大学水俣学研究センター 発行人／原田 正純  
連絡先／〒862-8680 熊本市大江2-5-1 熊本学園大学水俣学研究センター  
Tel：096-364-5161(内線1581) Fax：096-372-0702  
http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/ E-mail:minamata@kumagaku.ac.jp  
印刷／ホープ印刷株式会社